

『姿百人一首小倉錦』紹介

菊池 真一

「日本古典籍総合目録」に『姿百人一首小倉錦』はない。筆者は二本を所有しているが、明治版である。甲本は東京・芝神明前・甘泉堂・和泉屋市兵衛板、乙本は刊記欠。国会図書館に明治20年版『姿百人一首小倉錦』があるが未見である。書誌には富山・鶴棲堂・真田善次郎とある。

甲乙本いずれも中本、扉には「姿百人一首」とあるが、題簽には「姿百人一首小倉錦」とある。丁付けは五丁から始まり、五十四丁で終わっている。一丁から四丁は欠であろうか。この百人一首は百科物ではなく、下段に百人一首を掲げ、上段（頭書）に注釈を施したものである。著者不明。

翻刻にあたり、漢字は通用文字を使用した。振り仮名は省略。清濁は原本とおりである。解読不能文字は「？」とした。

一首ごとに、下段の「百人一首」を翻刻し、続いて上段の注釈を翻刻する。

姿百人一首小倉錦（角書部に「甘泉堂刊行」とあり）（表紙題簽）

姿百人一首

芝神明前 甘泉堂梓（見返し）

天智天皇

秋の田の苜蓿の庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ

此哥の心は秋の田に庵たつるころ秋のすへになりゆきとまなども朽そんじて露をふせぐ便りもなく我そでのぬるゝよし人王道御じゆつくわいの御哥にて定家百首の始にえらび入れられしは民をあはれみ給ふ御心を尊びて也かりほは仮の庵也万葉に借庵と書り御？と書く 季吟の注に曰万乗の主として民をあわれみ給ふは聖主賢王の事也と殊に田夫のわざをつぶさにおぼしめし入れられし

ていなり」（五才）

持統天皇

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかく山

是は卯月朔日衣がへの御哥也春三月はかすみたる山のけふはやはれて雲の白々とさながら夏衣をもほしたるごとくに見ゆると也むかし此山に天人衣をたけほしたることあるゆへかぐ山とはよめり新古今には夏の部の巻頭に入れたりいせ物がたりには露とこたへてきへなましものをといふにつきてあいじやうの部に入れたりいづれもよく見て入れたり 季注に曰たゞ夏といはずして春すぎて夏来といへば首夏の次第あきらか也」（五ウ）

柿本人麿

あし曳のやまどりのをのしだり尾のなが／＼し夜をひとりかもねん

此哥の心はあしびぎとは山をいはんため又山どりの尾はなが／＼しなどいはんための枕ことば也秋の夜のながきに二人りねてさへうかるべきにひとりはいえこそねられまじきと也別なる義などはさになし只あし引のとうち出したるにより山どりのをのといひて長／＼しよをといへるさまかぎりなきふぜいもつとも丈たかし季注に曰たゞ長きよといふよりもなが／＼しよといふにてひとりねのわびしさせんかたなくきこゆ」（六才）

山辺赤人

田子のうらにうち出て見れば白妙の富士の高ねにゆきはふりつゝ此哥の心は田子のうらに舟さし出てかへりみるに富士の山も見へ眺望かぎりなくして心ことばもおよばぬに高根は雪さへ見たる心に思ひ入てぎんみすべし余情かぎりなしさればこそ赤人をば古今にも哥にあやしく妙也といへり 季注に曰田子のうらに出てふじ

の高ねを見つるけしき言説におよぶ所ならねば其ていばかりをいひて風致おのづからこもれりされば此哥の心をことするも又舌頭のおよぶ所にあらず」(六ウ)

猿丸太夫

奥山にもみぢ踏わけなく鹿のこゑきくときぞ秋はかなしき

此哥の心は秋ははじめよりあはれなるものとは申せども草の花さきみだれ露も月もおもしろくよろづの虫のねもをかしかるべし秋のすへになりてはそのけしきもつきはておち葉ものすぎきに鹿のつまこひかねてなくじせつこそじつに秋はかなしきともおく山にといへる五もじ又かんじん也元の抄には端山のもみちちりて次第に秋のいろの時かなしきといへはしかのうちわびてなく時の秋が至てかなしきといふ義也とあり此秋は世間の秋なり」(七才)

中納言家持

鶺鴒のわたせるはしにおく霜のしろきを見れば夜ぞ更にける

此哥はらうゑいに月おちからすなきて霜天にみつといへる詩の心也家持あん夜にあふて月もなくさへたる天にむかひて吟じ思へる也霜天にみちたるとて目前にふりたるにはあらず晴夜の寒天さなから霜のみちたると見ゆるてい也これは御説也かさゝぎはからすのことにて七夕の夜からすはねをならべて二星をわたすこれをかさゝぎのはしといふ也」(七ウ)

安陪仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山にいでし月かも

此哥はもろこしにて月を見てよめる也むかし仲まるもろこしへまゐりてかへる時わが国を思ひやり又すみなれたる旅居のなごりも思ひつゞけかの国のみなとよりはれわたりたる月を見て日の本のならのみやこなる三かさの山に出し月と同じ心にうかみかのくに此国のへだてなくたんできの思ひをなしあはれもふかく余情かぎりなきてい也此とき唐人のおくりしといふはなむけの詩などもある也」(八才)

喜撰法師

我庵はみやこのたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり

此哥の心はきせんほつし都の辰巳なる宇治山にいほりをしめて住るに人は世をうぢ山といへともわれはたのしみてかくのごとく心よくすめると也みやこのたつみとは方角をことわる也古今の序にはじめをはりたしかならずといへるはよをうぢ山と人はいへどもといふべきを人はいふなりといへる所をさしていへ又秋の月を見るにあかつきの雲にあへるがごとしとはいかにものこりをしきといふ心なるべし」(八ウ)

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに此哥はわか身の世にふる老をかんじ花によそへて思ひをいひのへたり小町が古今にて第一の哥とすかの集に後に人たる哥也此哥にうらおもての説あり表は花のさきたらば花に身をなさんと思ひしも世にすめはことしけくてとやかくやうちまぎれ過たる花も見ぬ花なれうつりにけりなと察していふ也裏の説は気のおとるへもわれとはしらぬものなり只花のおとるへを見てわが身もかくうつりてこそあらめとおもひやる義也」(九才)

蝉丸

是や此ゆくもかへるも別れてはしるもしらぬもあふさかの関此哥はゆくものかへるものしれるものしらざるものしばらくわかれさまよひ生死の関を思ひては出すしかれども法性の都へいたらんには此関を思ひてはあひかたしと世の中をかんしてよみけるならし後撰ことばがきにあふさかの関に庵室をつくりて住すへるにゆきかふ人を見てとあり是や此とはあふ坂の関におちつく五もし也表は旅客の往来のさまにて裏は会者定離の心也」(九ウ)

参議堂

和田のはら八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり舟此哥古今詞書におきの国へながされける時舟にのりて出立とて京なる人のもとにつかはしけるとあり心はまづわたの原といひいでたるさまあはれふかきにやわたのはらとは海原のことにて大かた

の人だに海路のたひにおもむくべきはかなしかるべきにましてや
是は流人となりおほくのしまノを經てしらぬ浪ちをわたる心ほ
そさたとへがたくかへるつり舟あまの心なきものに此ありさまを
つけてよとわびたるかなしさいはんやうな(ママ)(十オ)

僧正遍昭

天津風くものかよひぢ吹とぢよをとめの姿しばしとゞめん

此哥の心は空ふく風のくものかよひぢふきとちよしからば乙女の
すがたしばしとゞめて見んとねがひたるさま也古今には五節のま
ひ姫を見てよめりとあれば俗の時の名宗貞とあるべきをこゝには
定家卿へんげうとのせられたり此うた今のまひ姫をむかしの天女
に見立てよめりされは舞のなごりををしみて雲のかよひぢふきと
ぢよといへりしはしといひたるてとゞめえぬ心きこへたり是まひ
ひめに心をかくるにあらすまひのおもしろきによりてなり(十
ウ)

陽成院

筑波ねのみねよりおつる美なの川恋ぞつもりて測となりぬる

此哥の心はいかなる大河も水上はわづが(ママ)なる苔の下より
しただりおちあつまりてすへはそこしれぬ川となれり恋の上にて
も見そめたるおもかげのほのかなりしと思ひつもりぬればしのび
がたき心となりぬるよしのたとへつくば山みなの川みな常陸の
名所にて此川の東はさくら川へおつるといへり此水つくばねより
まさごの下をくゞりてそれとも見へず一トわたりにながれてすへ
は川となれり此御哥は惣じて序哥也(十一オ)

河原左大臣

陸奥のしのぶもぢぢり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

此哥の心はたれゆへにみだれそめしわが心は君ゆへにこそみだれ
たれといへる義也おう州しのぶのこほりより出るころものあやの
みだれたるにいひよそへしゆへしのぶといひあまりてみだれたり
といへり古今題しらすの内の哥にて上二句はみたるゝといはん
との序也古今にはみだれんと思ふわれならなくといへり又曰奥

州しのぶのこほりにて布にしのぶ草をすりつけてもやうにするに
そのもやうみだれたるものゆへみたるゝといはん為の序に用ひし
也(十一ウ)

光孝天皇

君がため春の野にいでゝわかになつむ我衣手に雪はふりつゝ

此哥は正月七日七種のわかなわ人に給ひける時あそばし給ふとな
り心は君がため春の野にいでゝわかになつむに余寒はなはだしく雪
の御衣にかゝりかんなんの時ながら人のためをおぼしめす御心入
れありがたし此うた仁和のみかど親王にておはしましける時に人
にわかな給ひける時の御哥とあり仁和のみかどは光孝の御こと也
此日わかなをふくすれば百びやうをのぞくといふ事あればかくの
ごとくなし給ふ也(十二オ)

中納言行平

立わかれいなばの山の峯におふるまつとしきかば今かへりこん

此哥は行平みのゝ国を知行してかの国に下るほどに友なる人うま
のはなむけにとて出たるときいつかへり給ふといへればかくよめ
りいなば山はみのゝ国の名所也たちわかれいなばといひみねにお
ふる末としきかばといひみな序哥のてい也又此卿いなばの守なり
しが任はてゝ都へのぼる時思ふ人によりてつかはせし共いへり哥
の心はまつ人だにあらば今のまにかへりこんなれども待人はあ
らじとそこ心人にふまへたる哥也(十二ウ)

在原業平朝臣

千早ふる神代もきかずたつた川からくれなゐに水くゝるとは

此哥ちはやふるとは神といはん為の枕ことば也たつた川にもみぢ
のちりうかびたるていのおもしろさ神代には妙なることのみあり
といへ共その神代にもいまだきかずからくれなゐのにしきに水を
くゝるとはいへるていさへ也是はくゝり染とて糸にてくゝりてい
るノにそめなしたる絹にたとへていへり又曰詞がきに二条のき
さきの春宮のみやす所と申ける時にびやうぶにたつた川にもみぢ
ながれたるかたをかきたりけるを題にてよめるとあり(十三オ)

藤原敏行朝臣

住の江のきしによるなみよるさへや夢のかよひぢ人めよぐらん

此哥の心は住の江のきしによる浪はよるさへやといはん為の序也
よぐとはよるといふこと也夜ゆめのかよひぢには人めをよくべ
きにもあらぬにそのゆめにさへ心にしのぶならひとてなほ人めを
よくと見へて心のまゝにもならずさてもノとなげきたるてい
也高ききしにこそ浪のうちたらばゆめもさむべきことなれ是は南
海也ことに住の江のきしはあらし浪もよせぬ所なるにわがゆめぢ
のちぎりのさまたげとなるはいかにといふ意もふくめり」(十三
ウ)

伊勢

難波がたみじかきあしのふしの間もあはで此世をすぐしてよとや
此哥の心はあしをいはんとてなにはがたといひみじかきほどの節
の間と人のぬる間わつかなるによせていひあはで此よをすぐせと
やといふ此世もあしのふしの間のよをいひかけたる也すこしのま
もぬる夜はなしにすぐせといふことかといへる也なにはかたとは
大やうによくいひ出したり五もじに君臣ありこれは君のかたの五
もじ也又恋にはしめ中をはりあり此哥をはりの心也ゆゑに心は
今までつもりし思ひをかぞへあけたる也かやうの哥をばおほよそ
に見ては曲あるべからずと云々」(十四才)

元良親王

わびぬれは今たおなじなにはなる身をつくしてもあはむとぞ思
ふ

此哥の心今はたは今まさと心得べしみをつくしは海のふかきし
るしに立る杭也われにみをつくしのごとく朝夕思ひわび袖をほす
まのなくとも一とたびあひたらんには可也此哥ことば書とことい
できてのちに京ごくの御やす所へつかはしけるとあり是は宇多の
御門の御時此みやす所にちぎりにかよひけるがあらはれてのちに
つかはしたる哥也事のいできてとはくぜつわざはひのいできしこ
とをいふ也又曰みをつくしてもは身をはたしてもと云義也それを

みをつくしによせていへり命にかけてあはんとなり」(十四ウ)
素性法師

今来んといひしばかりに長月のありあけの月をまち出つるかな
此哥の心は一と夜の義にあらざ初秋のころより今こんと云しばか
りのあることをさりとともまちノてはや長月のころに至りあり
あけの月をまちいでつるかなといへりあはれふかし此哥有明の月
をまちでつるかなと云を顕照は一とよのことといへり定家卿の心
は又一つ也月のいくよをかさねしと初秋のころよりはや秋もくれ
月もありあけになりたると也他流当流のけぢめ也又長月は九月の
こと也」(十五才)

文屋康秀

吹からに秋のくさきのしほるればむべ山風をあらしといふらん
此哥の心はあき風の吹からに草木のしほれはてゆくにしたがひて
思ふにけふも山風と書てあらしとよむもじは此時より思ひ合たる
也むべはげにも是はこれさだの親王の家見哥合の哥也とあり古
今の序にことばたくみなるさかひにいへり説々の多き哥也木ごと
に花ぞさきにけるを木へんに毎の字をかくゆへ梅の字の心といひ
山かむりに風をかきてあらしの字の心といふ説あり用ひがたし只
あらし風と心得てよし」(十五ウ)

大江千里

月見ればちゞにもものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど
此哥の心は月を見ればいろノの事共思はれてかぎりなきかなし
さの身にまとひたるやうに思はるゝ也ちゞとは千々の字にてかず
ノといふ義也わがみ一つはわれノ一人の秋にてはなれどわ
れ一人りがかなしきことのやうに思はるゝと也又曰日は陽の気な
ればむかふに心和する也月は陰の気なればうちながむるに心もす
みあはれも次第にすゝむものなりさればちゞにもものこそかなしけ
れとかずかぎりもなくあはれふかきていなり」(十六才)

菅家

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまにノ

此哥は菅公手向山へ御幸の時供奉にてよみ給ひし也心は此たびは御ともの事なればぬさもとりあへずよりて此山にある所のみぢのにしきをそのまゝにぬさとしてたむけ奉るとなりぬさとは神にさゝぐるへいはくのこと也神のまにノゝとは神の心にまかせ奉るといふこと也詞書にしゆじやく院のならにおはしましける時に手むけ山にてよみけると有此たびは旅の字といふ義もあり又幣帛もむかしはにしきをもつてせしと也」(十六ウ)

三條右大臣

名にしおはゞあふさか山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

此哥の心はあふさか山のあふといふ名におへるものならはやくそくをたかへすしてまことに来るよしもかなといへる也さねはしんじつのこと也さねかづらは鶯のるい也かづらといふよりくるとえんをとりたる也人にしられでとは人にしれぬやうにしのびてくるよしもがなとねがひたる也詞書に女のもとへつかはしけるとありさてさねかづらは是を引とるにしげみあるものなればいづくよりくるとも見へぬもの也そのごとくわが思ふ人も世にしられずして来よかしと也がなは願の詞也」(十七才)

貞信公

小倉山みねのもみぢば心あらば今一たびの行幸またなん

此哥は詞書にていじ院大井川に御幸ありて行幸もありぬべき所也とおほせ給ふ御事のよしそうせんとて此哥をよめりと云々さて心は此卿供奉にて院のしかおほせられしかばとりあへず御ゆきはすでにありをぐら山のもみぢ有がたく思ふ心あらばとてもの事にちらずして今一とたひの行幸をまちつけよと也心なきものにむかひて心あらばといひたる皆わか的心ざしにてゆうなる情也又仙洞には御幸とか天子には行幸と書例也」(十七ウ)

中納言兼輔

みかの原わきてながるゝいづみ川いつみきとてか恋しかるらん

此哥の心は水のわくごとく人をこふる心のかぎりはてなきをたと

へていはんとていづみ川いつみきとてかとかさね詞にいひながしたる也いつのほどに見きゝてかくこひしとは水のわくごとくに思ふらんとわれとわが心をあやしみたる也みかの原泉川みな山城の名所なり新古今に題しらすとあり哥の心はあふてあはざる恋と又いまだあはさるこひとの両やう也又わきてながるゝはいづみにえん有る字にていつみきといはん為ぞ是も又序哥也」(十八才)

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

此哥の心はおもてのまゝ也山里ながら春秋は花もみぢにたよりあるべきが冬はさうノゝ人めも草もかれぬといへること也さびしさは山里のものといへども冬は又とりわけさびしさもまさるといひ人め草ともにかれたるといふよせいかぎりなし人めのかるといふは人めの遠ざかりたる也詞書に冬の哥とてよめるとあり山は四時さびしきものなり冬ぞのもじに心をつけ次に山里はの文字に心をつくべしと三光院の御説なり」(十八ウ)

凡河内躬恒

心あてに折ばやをらん初霜のおきまどはせるしらぎくの花

此哥の心はしら菊の花に霜のおきわたしたるはいづれがしもぞとまどひたる也心あてに折んよりほかなしとよみたり心あてはずいりやうのこと也此哥しらぎくの花をよめるとありさてをらばやをらんはかさね詞也をらばをりもやせめといふこと也いづれもあらましごと也菊をも霜をもともにあいしたる哥也はつしもの初の字に力を入れて見る哥也はつしをもいまだ見ならはぬと也」(十九才)

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかりうきものはなし

此哥の心は人のもとにかよひけれどもその人つれなくしてあはずほいなくかへるさま也有あけの月はつれなくのこりて夜はあけぬるにあはでわかるゝことのつらさはよりあかつきほど世にうきものはなしとひとへに思ひ入りたりこれはあふて実なきこひ也扶桑

葉林集とて百帖ばかりあるものありさが天わう此かたのうたをあつめたる本也それにはあはずしてかへる恋とあり他流にてはあふてわかるゝこひ也心は両注ともにあきらかなり」(十九ウ)

坂上是則

朝ぼらけありあけの月と見るまでによし野のさとにふれるしら雪此哥の心はあかつきがたみよしのゝ山のくさ木を見れば有明の月かげのごとくしろゝとはつ雪のうすくふりたるてい也名所の初雪の題にて心はあきらかに見へたり此うたやまとの国にまかれる時雪のふりけるを見てよめると有さてあさぼらは夜のあけ行ころにて朝旦朝朝明旦いづれもあさほらけとよむなり 季注に日明方の月は影うすくしてさすがに明白ならねば雪のうすくふりたると見まかふもの也」(二十オ)

春道列樹

山河に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり此哥の心は山川へ木の葉をおほく風のふきかけたるがしからみとなりてながれもあへぬてい也風のかけたるしからみは何ものぞと見ればながれもあへぬもみぢ也けり和我ととひわれとこたへたる哥のさま也風のかけたるがめつらし此うたしかの山ごへにてよめるとあり此五もじ万葉に山から川とのことにいへる有その時は河の字をすむ也是は只河の字にごるべし又木のはの流れてせかれたるをしがらみといへりあへぬは敢の字を書ながれもはてぬといふ義なり」(二十ウ)

紀友則

久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なくはなのちるらん此哥の心は雨風に花のちりはべるは申事なし風もふかでのどけかるにひとり花のしづかにもなくちることのうらめしきといへる也かくのどけき日に何事ぞ花はいそがはしくちるといふにてちるらんのはね字もきこへたる也詞書にさくらの花のちるをよめるとありある人為家卿に此心は人の心か花の心かとたづねしにいづれにてもしるべしとこたへられしと也此哥花ぞちりけるともあるべき

所なるをちるらんといへるにてれいらくすることをふかくをしむ心とはなれり」(二十一オ)

藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂のまつもむかしの友ならなくに此うたは題しらずの哥也心はわが身としおいてのちはいにしへよりさまゝになれにし人のあるひは此世にながらへたるもつるとほざかりあるひはさきだちてとゞまらぬもありいろゝになりてたゞひとりのこりつゝ今は朋友の心しりたるもなきときとなれり只高さごの松こそいにしへより年高きものなれと思ふ是も又わがむかしの友ならねばたれをかする人して物語はんとうちなげきてい也」(二十一ウ)

紀貫之

人はいざこゝるも知らずふるさと花ぞむかしの香に匂ひける此哥の心は貫之はつせにまふでぬるたびごとにやどりける宿坊にひさしくおとづれせざりければあるじうらみける時そこに有あふ梅の花ををりてかくよめる也いざとは不知と書り人はいざわがかりりなき心をもしらずさやうにうらみらるれども此梅の花ばかりはわがまごゝるをよくしりたると見へてむかしにかはらずよきほひぞすなるとあるじのうらみをうちかへして貫之又うらみたる哥なるべし」(二十二オ)

清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいつこにつきやとるらむ此哥の心は夏の夜はあけやすきものなるに月をめであはれむころはいとゞのよのみじかさまだ宵の間と思ふほどにはやあけたるやうにおもはるゝに月は又くものいづこにやどりてをるやらんいまだゆくさきまではえもゆかじといたく月ををしめてい也詞がきに月のおもしろかりける夜あかつきがたによめるとありまことにゆうにあはれなる哥也」(二十二ウ)

文屋朝康

白露にかぜのふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

此哥の心は秋の野のえもいはれぬ千ぐさの花のうへにおきたる露を風の吹しきりたればそのちりみだれたるさまさながらつらぬきとめざる玉のごとく也とよめりめであはれむ心のたへにしてことのはのやうにまことなるもの也此風のふきしくはしきりにあらきかぜといふ義也此哥はべつに心なし当意の風吹たるけいき也つらぬきとめぬとは玉は糸にてつらぬくものなればこれをぬきみだしたるかといふ心也(二十三才)

右近

忘らるゝ身をばおもはず誓てし人の命のをしくもあるかな

此哥の心はわすられはつるわが身をおもはずしてちかひをかけたかはらしわすれじといひし人のいのちの神のたゞりにて死なんこそをしくかなしけれとよみたる也又ある注にたゞ人の千々のやしるを引かけてもし心かはらはいのちもたえなんとちかひたる人の心へんじたる時によめり心はあきらか也但しかくちぎれる人のかはりゆくをばうらみずしてなほその人の命を思ふ心尤あはれふかき哥なるべし(二十三才)

参議等

浅茅生のをのゝしのはら忍ぶれどあまりてなどか人のこひしき

此哥の心はあさぢふはををいはんためしのはらはしのぶといはんため也かやうにしのぶとは思へどもいかであまりてものを思ふよしの人めに見へはべるならんと心ならぬ思ひをいひのべたる也是も序哥也あさぢふの小野は名所にあらずさてしのべどもゝあまりて人めにたつほど何とてかくは人のこひしきやらんと一づにわれをたしなめたる心也(二十四才)

平兼盛

忍ぶれどいろに出にけりわが恋はものや思ふと人のとふまで

此哥の心は人にしられじとしのぶゝとすれどもしのびあまりてはやものおもひをするやと人もとふほどにいろに出にけりとおどろきてよめるなり是はてんとくの哥合の哥也うたの義はあきらか也心をまもること城郭のごとしといへりしかればずいぶんわれは

かたくしのぶとおもひしを人のふしんするにつきてさほどまでに思ひよすれるよと心にうちなげきていへるさま尤あはれふかし季注に曰いろにいでにけりといふにてさてもいろにいでけるよとおどろくていにきこえたり(二十四才)

壬生忠見

恋すてふわが名はまだき立にけり人しれずこそ思ひそめしが

此哥の心はこひすといふわか名ははやくたちける事よ人はよもしらじとしのびたるに我おぼへずそのいろにも見へけるかと也天徳の哥合に前の哥とつがひたる哥也こひすてふはこひすといふと云こと也まだきははやく也 祇注におくの哥はすこしまさりたるよしをいへりまことにことばつかひ比るいなきもの也詠哥一体には前の哥をほめたり 季吟の曰おもひそめしよりほどなくはや名の立ける事かな人しれずおもひそめしかども思ひのふかきゆゑにはやあらはれたる心聞ゆ(二十五才)

清原元輔

契きなかつみに袖をしぼりつゝ末のまつ山なみこさじとは

此哥すゑの松山は奥州の名所也 君をおきてあだし心をわれもたばすへの松山なみもこえなんといふ本哥よりよみたる也かたみはたがひのこと也此哥本縁此山をなみのこへん時わがちぎりはかはらんといひしことありことゝくみなそれにてよめり心はさてもあたにかくかはりやすきものをたがひに袖をしぼりつゝなみこさしとちぎりきなとすこしはぢしむかやうにいへる心也ちぎりきなはちぎりけりなといふをつめたる也(二十五才)

中納言敦忠

逢見てののちの心にくらぶれば昔はものをおもはざりけり

此哥の心は君を思ひそめてよりたゞ一とすちにあひ見まくほしとのみなげきつるが一夜あひてはわかれのあしたよりあはぬむかしとわかれてのちのうさをくらぶればなかゝむかしはものをもおもはぬやうにおもはれ猶おもひのましたる心なり又はしのぶといふ事のくはゝるほとにあはさりしさきは物思ふまでもなかりし

と也又思ひのきさしてはかたちをも見ばやと思ひおもかげをみては詞を通ぜんと思ひ次第に思ふことのつりし此哥やすくきこえたれどもその心ふかき哥也」(二十六才)

中納言朝忠

逢ふ事の絶てしなくはなか／＼に人をも身をもうらみざらまし

此哥の心はあふといふことの世の中にたへてなきものならばなか／＼によからんしからば人を恨しく思ふこともなく身をうらむることもなからんあひ見ると云ことのあるゆへにこそものをも思へとあらぬ事に心をよせておもひあまりたるつらさをいひ出せり是はあふてあはざるこひの心にてよめり心をつくしきてのこと也世の中にたへてさくらのなかりせは人の心はといひたると同意也なか／＼といふこと只是いらぬ也 季吟曰一義はつかにもあはまほしき本意となるをかくかれ／＼になる思ひの切なればなか／＼始にあふことのたへてなくは恨もあらじと也」(二十六ウ)

謙徳公

哀れともいふべき人はおもほえで身のいたづらになりぬべきかな此哥の心はあはれともいふべき人はうつ／＼なくかはりはてぬればいふにたらずわきにも人のしりてあはれむものあるべきとおもほへず只わが身のみいたづらになりはつべきさてはくちをしき身のはてかなとよめる哥也詞書にもいひける女の後につれなくなり侍りてさらにあはず侍りければとあり此いふべき人はおもほえでとはくがいの人をさしていへりわが思ふあひてをばいふにたらざる事なるべしまた曰おもほえでは覺ずして也身のいたづらにはわがみむなく死するをいふ也」(二十七才)

曾禰好忠

由良のとをわたるふな人がちをたえ行衛もしらぬ恋のみちかな

此哥の心はわがこひぢのいひよるべきたよりもなければさながらに思ひすてられずつもりつもれる思ひはゆくゑもしられずゆらのとをわたる船人のかちをたちたるがごとしとたとへていへる也由良の門は紀州なり玄旨の曰此ゆらのはなみあらし所なるべし心

は大海をわたる舟のかちなからんはたよりをうしなふへきことなりそのふねのごとくわがこひぢのたのむたよりなくゆくゑもしらぬよしなり」(二十七ウ)

惠慶法師

八重葎しげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋は来にけり

此哥の心はやへむぐらは草の名也そのやへむぐらのしげれる宿ながら秋はかならずとひくれども人はたへてきたらすと也むぐらやとはすべて秋のもの也 宗祇曰心はあきらかにきこへはくれど往古とほるのおとゞのさかへも夢のやうにてむかしわすれぬ秋のみかへる心をあはれとうちことわりたるさまたぐひなくやよ／＼かはらの院のむかしを思ひつゞけて此哥をば見侍るべきとぞ 季注むぐらのやどのさびしきに人こそとはさらめあまつさへ秋きにけりと也」(二十八才)

源重之

風をいたみ岩うつなみのおのれのみくだけてものを思ふころかな此哥の心は万葉の哥に 山ぶしのこしにつけたるほらのかひおづ／＼として岩にあててくだけてものを思ふころかなといふ本哥をとれりされはつれなき人はいはほのごとくいくたびなみの思ひをかくれ共ちり／＼にくだくる也われつれなき人を見てこひせんとにはなけれどもおのづから物を思ふと也 季注に曰一義おのれのみは世間にわれはかり心肝をくだきてものおもふと也」(二十八ウ)

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士のたく火の夜はもえて昼はきえつ／＼物をこそおもへ

此哥の心はみかきもりとは大内にてか／＼り火をたくやく人ん也衛士とはゑもんづかさ也このゑじがたく火も夜ばかりもへて思ひくるしきさま也ゑじのたく火のやうによるはもへてと字をくはへて心得べし 玄旨の曰衛士は左衛門の下につかふ士也左衛門は外衛のみかきを守る也心はわれ人めをよくるゆへにひるは火のきゆるやうなれ共よるは又もゆると也 宗祇の曰ひるはもゆる思ひをや

すましたるさま也」(二十九才)

藤原義孝

君がためをしからざりし命さへながくもがなと思ひけるかな

此哥は後朝の哥也あはぬほどはいのちにもかへてとおもひしに命
あればこそかくはあひたるなれ今はなほいのちをしきよし也もつ
ともあはれふかかるべし心は大かたにあきらかなれども思ひける
かなといへる詞に見所あり人を思ふ心のせつなるまゝにわが心の
いつしかながくもおもひ侍ることもといふ所をよく見はへるへき
哥也とぞ此かなをばかへるかなといふ也又ぬるかなといふは過去
のこゝろありけるかなは当意の心也又ながくもがなはながくもあ
れかしなとねがふことば也」(二十九才)

藤原実方朝臣

斯とだにえやはいぶきのさしもぐささしもしらじな燃るおもひを
此哥かくとたにえやはいぶきとはわが思ひかくとばかりえも云出
しえぬといふこと也云をいぶきといひかけたり又いぶきのさしも
ぐさは江州いぶき山に生るよもぎの事なりさしもといはんために
いへり心はわがおもひさしもくさのもゆるがごとくなるもかくと
ばかりえいはぬゆへにその人はさしもしらじなせたとひたとひた
すらに思ひつゞくるよし也 季注おのが思ひに身をこかしつゝと
いひ又身をやくらんといふ哥によりてよめるなり」(三十才)

藤原道信朝臣

明ぬればくるゝ物とはしりながらなほ恨めしき朝ぼらけかな

此哥は後のあしたの哥也夜のあけては又暮はべるべきはしりたれ
ども人にあふてわかれのらつさに夜のはやくあけぬる此あさほら
けがうらめしきと也後拾遺第十二恋詞書に女のもとより雪のふり
侍る日かへりてつかはしけるとありて哥二首ならびて入りける
かへるさの道やはかはるかはらねどとくるにまどふけさのあはゆ
き今一首は此あけぬればの哥也しりながらといふにふかき心ある
にや」(三十才)

右大将道綱母

歎きつゝひとりぬるよの明るまはいかに久しき物とかはしる

此哥の心は此御もとへある人かよはれしに門の戸おそくあけしと
てうらみられしかはかくよみていだしけるそなたにはなれぬる人
二人りありてこなたへはまれにとそかよひき給へさればわらはか
まちわびてうちなげきつゝひとりねのとこに夜のあくるをまつ問
の久しきをばいかにかなしきと思ひ給ふや戸をあくるまのおそき
をだにうらみ給ふはおろかにこそといへる也後しうゐ集第十四恋
詞かきに入道撰政まかりたりけるに門をおそくあけければうらみ
けるによみて出しけると有」(三十一才)

儀同三司母

忘れじの行末まではかたければけふを限りの命ともがな

此哥の心はある人こなたへかよひけるにその心さだまりがたく見
ゆれば今かくうれしくちぎれるうちわがいのちもたへよかしあか
れと後くゆるともかひなしと也新古今しふ恋の部の巻頭にあり詞
書に中の関白かよひそめはべるころと有踏雪の曰哥の心はたとへ
いくとせをふるともかはらじとはいふ共世けんのありさま変じや
すきならひなれば今わすれじとは思ひ給ふべけれどその心をゆく
すゑまでたもたん事はわすられたる時ものおもひをせんよりはと
也」(三十一才)

大納言公任

滝の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

此哥の心はむかしさがの大学寺に滝殿とて滝の侍りけるを見にま
かりけるにその滝ははやたへはべりたれども名のみはなほ高く世
にもながれてきこへけると也大学寺もとは学問せし所也後に覺の
字にあらたむると云々 季注にきゝつたふる人もなきあとはおの
づからあはれもとゞまらずつづもれぬ名ののこるにてむかしのし
のばれぬる感情をもよほすこととしほなるものなり」(三十二
才)

和泉式部

あらざらむこの世の外のおもひでに今ひとたびのあふこともがな

此哥は式部わづらひけるときしる人のもとへよみておくりし也あらざらんは存命おぼつかなき也此世の外とは来世をいふおもひではたのしみぐさに思ひ出ること也心はわらは今かくわづらひてとてもながらへはつべうも思はれねばせめては此よのほかなるほとけの国へゆきてをり／＼思ひでゝたのしみぐさとなさんために今一とたびあふこともあれかしなとねがひたる也此女房いづみの守道貞がつまとなるよつていづみ式部といふ詞書にこゝち例ならずはべりける時人のもとにつかはしけると有」(三十二ウ)

紫式部

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半のつきかな

此哥の心はたびだちてはる／＼ありてかへりきたりけるに道にて我見なれしともいまだそれとも見えわかぬまに見うしなひしをくもがくれせし月によそへよめる也玄旨法印の抄に曰く人にあふてやがてわかれたるさまさながらながむる月にはかにくもがくれせしごとくなりとよめり人を月にたとへていへることばづかひさらにぼんりよのおよぶ所にあらず」(三十三才)

大弐三位

有馬山ゐなのさゝはら風ふけばいでそよ人を忘れやはする

此うたことばがぎにかれ／＼なる男のおぼつかなくなんといひたりけるによめるとありありま山はいなのさゝはらをいはんためのまくら詞なり風ふけばはいでそよといはんためにいへり是序哥也さて心はちぎりける男のはやわれをばわすれつらんなどいひける時たとひそなたはつれなくなれるともそれにならひていでやそれよとはやくも人をわすれやはするまことなきものにはあらじとこたへし哥也」(三十三ウ)

赤染衛門

やすらはで寝なましものをさよふけてかたぶくまでの月をみしかな

此哥やすらふは心おちゐる也さればやすらはではおちゐすして也

さていひかはせし人のこよひ来べしとやくしたればわが心やすらひてかならず来べしと心あてにしてやがて日のくれたれどいねもやらて今やきたると月をながめながらまでども／＼おとづれせずはや夜はふけて月もいたくかたふきけれどもその人はつゐにきたらずかほどならばこゝろやすらはではやくねなましものをと後悔してよめる也」(三十四才)

小式部内侍

大江山生野のみちのとほければまだふみも見ずあまのはしだて

此哥小式部はいづみ式部がむすめ也大江山いく野みなはしだての道也はしだては丹後の国に有まだふみも見ずとはいまだゆきて見ぬといふ義也又母のふみの義もふくめり此ころ母はわかれてたんの国にありしゆへ也是は小しきぶが哥をよくよめるは母がよみてつかはずなどゝうたがふ人ありて小しきぶが袖をひかへ哥合の哥はやはし立よりきたれるやと云ける時とりあへず此哥をよみしと也」(三十四ウ)

伊勢大輔

いにしへの奈良のみやこの八重ざくらけふ九重にほひぬるかな
此哥は一条の院の御時にならの八重桜を人の奉りけるに此女ぼう御まへにはべりければその花を給はりて哥よめとおほせられればよめると云々さて心はふるき都のさくら花のいる香も今このみやこにまゐりては一としほまさりて八重桜が九重にほひはべると賞くわんしたる当座のことばまことにめでたし内裡を九重といふゆへさくらの色香をかね又今日此所の辺といふ意もふくみていへり」(三十五才)

清少納言

夜をこめてとりのそら音ははかるとも世にあふさかの関はゆるさじ

此哥の心はある人がよひ来て夜ふかにかへらんとしけるゆへいまだ関の戸をあけまじければしづかにかへり給へととゞめし也とりのそらねとはむかしもろこしにて孟嘗君といひし人いくさにうち

まけくわんこく関といふせきぢをとほらんとしけるに夜ふかくし
て関の戸を明ず臣下のけいめいといふものよく鶏のまねしければ
夜あけたりとて関をとほしぬそれはともあれ今此あふさかの関を
ばとりのまねしてたばかりたり共なか／＼にとほすまじきと也」
(三十五ウ)

左京大夫道雅

今はたゞおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな
此哥の心はせつなる恋なりたま／＼いひよること人づてばかり
にて心にまかせずたとへ此まゝ恋しぬるともせめてじき／＼にあ
ふて心のたけをいひもせばうらみはあらじ今はたゞ思ひつのでりて
いのちもたえはてなんとうちかこちたる也詞書に伊勢齋宮わたり
よりまかりのほりて侍りける人にしのびてかよひはべりける事を
おほやけもきこしめしてまもり女なんどつけさせ給ひてしのびに
もかよはずなりにければよみはべりけることあり」(三十六オ)

権中納言定頼

朝ぼらけうぢの川霧たえ／＼にあらはれわたる瀬々の網代木

此哥の心は題は川辺の眺望なりあさまだきにうぢの川ぎりのたへ
／＼なるひまよりあじろ木のほの見へはべるがをもしろきと也千
載しふ第六冬の部詞書に宇治にまかりて侍りける時によめるとあ
り人丸の哥に ものゝふの八十うぢ川のあじろ木にいざよふなみ
のゆくへしらずもといふによりてよめりあじろ木は川の瀬にくる
をうちて魚をとるしかけの木をいふせたへ／＼は霧の絶つたへず
するをいふ也」(三十六ウ)

相模

恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなん名こそをしけれ

此哥の心はうらみわびてなみだにかはかぬ袖のくつるさへ有るに
恋ゆへにむなしく下さん名ををしみたる也 季注に曰恨みわぶる
はせつなるならひなりわかるゝなみだの隙なく袖のくつるはこと
に思ひふかきを猶又名までもくちなんといよ／＼身にあまりたる
なげきなるべし」(三十七オ)

前大僧正行尊

諸ともにあはれとおもへ山桜花よりほかにしる人もなし

此うたの心は此僧正大みねへ入りしとき此山のありさま人跡とて
はたへてなきのみならず草木までも見なれず心ぼそきに只さくら
のさきたるもとに立より此花よりほかするものはなきに花も又わ
れよりほかにめづる人はあるまじさすれば花もわれももるともに
あはれと思ふよりほかなしとよめるなりかゝるやごとなき身にて
此深山に入りてめづらかにさくらはなを見ける時のさまをよく
／＼思ひ入て見べき哥也」(三十七ウ)

周防内侍

春の夜のゆめばかりなる手枕にかひなくたゝん名こそをしけれ

此哥詞がきに二月ばかりの月のあかき夜二でうの院にて人々あま
た居あかして侍りけるにすはうの内侍より臥て枕もがなとしのび
やかにいふをきゝて大納言忠家これをまくらにとてかひなをみす
の下より入れて侍りければよみはべりけるとあり心はみじかき春
の夜のゆめのまばかりの手まくらをしてそのかひもなくいたづら
にうき名のたゝんはくちをしきわざ也ゆへにその手はまくらにな
しがたしと也」(三十八オ)

三条院

心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

此哥は御ふれいたゞならざりし時御くらゐをゆづり玉はんとおほ
しめし御心ならずもしながらへさせ給はゞこの秋の大内の月おほ
しめし出させ給ふべきといへる御哥也 季注に曰ほんいにもあら
でながらへば見なれし金殿玉樓の月のいかばかりこひしかるべき
と也よはの月かなとあればとて月のみにかぎりて見るべからずむ
かしをしるのび給ふ事おほかるべし」(三十八ウ)

能因法師

嵐ふく三室の山のもみぢ葉はたつたの川の錦なりけり

此哥の心はみむろの山のもみぢをあらしのふきちらしたるをあな
かちに興なしと思ふべからずおちたるもみぢは見る／＼たつた川

のにしきとなりてなほおもしろきと也此哥かくれたる所なしたゞ
時節の景氣と所のさまとを思ひあはせて見はべるべしかくありノ
とよみいだす事その身の粉骨なり 季注に曰三宝よりちりおち
て下はたつた川也あらしにちる三宝の山のみぢはずなはちたつ
た川のにしとなれり」(三十九才)

良暹法師

寂しさにやとをたち出て眺ればいつこもおなじ秋のゆふぐれ

此哥の心は秋の夕ぐれのものさびしさ我やどのみかと立いでてな
がむればいづくも同じさま也と人のうへまでもはかりしりたるて
い也玄旨の曰心は大かた明らか也なほいづくもおなじといふに心
あるべしわがやどのたへがたきまでさびしきと思ひわびていづく
にもゆかばやとたちいでうちながむればいづくも又わが心の外
の事は侍らずと也 季注さびしさのやるかたありやと宿立いてゞ
も秋より外のやどもなければはなはだかたき心見へたり」(三十
九才)

大納言経信

夕ざれば門田の稲葉おとづれてあしのまる家に秋風ぞふく

此哥の心はゆふべになれば秋かぜのほのかにたちて門田の稲ばを
ふきなびかしたるが秋のいたるにしたがつてつよくおとづれあし
の丸やにすさましく夕べノノに吹つける時のきたれるをいひのべ
たり 玄旨法印の曰あしの丸やとはさながら芦ばかりにて作れる
をいふ也その門田のいなばに夕ぐれの秋かぜそよノとふくぞと
きゞもあへずやがてあしのまるやにふききたるふぜいをもつての
心なり」(四十才)

祐子内親王家紀伊

音にきくたかしの涙のあだなみはかけじや袖の濡れもこそすれ

此哥の心はたかしのはま名所也あだなみはあだなる人とはおとに
きくも名だかにといふによそへたる也そのあだなみをかけたらば
こなたの袖はぬれてのみあらんされども一たんちぎりし人と思は
ゞあだなる人なりともさすがすてられまじきほどにはじめよりさ

やうの人には否といふかへしの哥也袖のぬるゝとはなみだのこと
也おとにきくといふよりぬれもこそすれまでみなおもてはなみの
えん也心ことばかけたる所なくよくいひおふせたる哥也」(四十
才)

前中納言匡房

高さこの尾上のさくら咲にけり外山の霞たゞずもあらなむ

此哥の心たかさごは名所又山のそう名にて高山也をのへは山の
半ふくなりとやまは門山にて山の口もと也花のさかぬほどの山も
かずみのみねにかゝりたるもおもしろし花さきては霞は無用のこ
と也山まへにはたゞずしてあらまほしといへり 玄旨の曰たかさ
ごは山のそう名也名所にあらず心はあきらかにて正風体の哥也只
詞づかひさはやかにたけ有る哥也 季注に咲にけりといふて新に
桜を見て興じたる心有」(四十一才)

源俊頼朝臣

憂かりける人をはつせの山おろしはげしかれとはいのらぬものを
此哥の心はわが思ふ人にかにもしてあふよしもがなとはつせの
くわんおんへいのりけれどもなほその人のつれなきことあらしの
ごとくはげしくてそのかひなしかくあれとていのりはせざる物を
といへる也詞書に権中納言俊忠のいへにて恋の哥十首よみ侍りけ
る時のれどもあはさる恋といへる心をよめりとあり 定家卿の
近代秀哥にも此哥を見れば心ふかくよめり心にまかせまなぶとも
いひつゞけがたくまことにおよぶまじきすがた也とあり」(四十
一才)

藤原基俊

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

此哥はある僧の基俊をたのみてならのゆるま系の講師をのぞみけ
るにもれければもと俊いかゞと法性寺どのへうらみ申されければ
しめぢがはらとこたへらるこれはたゞたのめしめぢが原の哥の心
也しかるに又此秋ももれければもと俊させもが露を命はかなきこ
とによせかなしや又此秋も此まゝにてすぐることよとらみ申さ

れたる哥也ちぎりおきしはやくそくしておきし也させもはさしも
ぐさの事也秋もいぬめりは秋もかへりゆくべしといへる也」(四
十二才)

法性寺入道前関白太政大臣

和田のはらこぎ出て見ればひさかたの雲井にまがふおきつしらな
み

此哥の心はわだのはらは海の惣名也海上はるかにふねをこぎ出て
なかむれはまことに雲井と浪と一つになりてはる／＼と見たさ
れたるなり久かたはくもぬをいはん為の枕詞也海のかぎりなき
いをよくけいきをうかへていひ出したる哥也よせいかがりなし詞
書に新院くらゐにをします時海上遠望といふことをよませ給ひ
けるによめるとあり」(四十二才)

崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川のわれても末に逢んとぞおもふ

此哥の心ははやきたき川の瀬の岩にせかれて左右へわかれたる水
もその岩もとをすぐれば又ふたゝびあふもの也きみとわがこひ中
もそのごとく一たんへだてありて中のわれたりとも心だにかはら
ずは又すゑにむつましくあふことのあらんと思ふぞと也われても
はわりなくといふにおなし 季注に曰岩にせかるゝといひてあは
ぬ心をのべわれてもといひてぜひあはんとおもふ心をのへたり」
(四十三才)

源兼昌

淡路島かよふちどりのなく声に幾夜ねざめぬすまのせきもり

此哥の心はさひしきすまのうらに旅居してねざめのちどりをきゝ
てたへかたかりしにつけてかやうの所のせきもり等はいくよねざ
めしてちどりのこゑをきゝてたへわびぬらんとわがたびるのかり
ねよりつねに住なれたるせきもりのつらさを思ひやりたる哥也す
まのうらは源氏ものがたりにも海士のいへだにもまれになんと書
りわが一とのたびねさへかくのごとくなる関守の心はさこそと也」
(四十三才)

左京大夫顕輔

秋かぜにたなびく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ

此哥の心は秋風の雲をふきなひけててる月のかくれたるがをり/
＼そのくものひまより月かげのさしいでたるはせいて人のけしき
よりも一としほあきらかなるやうに思はるゝと也此うたおもしろ
き所なきやうなれどもじつにさるものにてありのまゝにうちい
せし所心ことばゆうにして又よせいもある哥なり」(四十四才)

待賢門院堀川

長からんこゝろもしらざるかみの乱れてけさは物をこそおもへ
この哥はあふてのちのあしたその人につかはしたるなりながゝら
んとはくろかみのえんにてけさわかれて又いつをかまたんといふ
事によそへてよみたる也くろかみといふよりみだれてものを思ふ
といひたる也ながゝらんは人の心をさしいひみだれてはわが心
なりさてながからん心もしらざるはゆくすゑかけてちぎりしこと
も人の心はかはりやすきならひなればすゑはいかゝあらんもしら
ずけさのわかれのつらさを思ひみだればべるかしといへる也 季
注に曰今朝の字後朝の心あきらかなり」(四十四才)

後徳大寺左大臣

ほとゝぎすなきつるかたをながむればたゞ有明の月ぞのこれる
此哥の心はほとゝぎすをまつころいく夜かつれなくすぎつるにや
うやくにして一とこゑをゆめかとはかりきゝもあへずそのゆくべ
きかたのそらをながめしたへはたゞありあけの月のみありてほと
ゝぎすははやかげもなしといへりほとゝぎすの哥はたくみなるも
の多かれ共これは只微細にいはずしかも心をつくしたる所よせい
かぎりなくこそ」(四十五才)

道因法師

思ひわびさても命はあるものをつぎにたえぬは涙なりけり

此哥の心は思ひわびとはものおもひのきはまり／＼たる時なりさ
りともと思ふ人はつひにつれなくなりはててわれひとらり思ひつ
めむねくるしきことかぎりもなしそれにてもなほ命はつゝがなし

ながらへてだにあるならば又思ひをとぐる折もあるべしとわれはよくあきらめても只ものうきにつきてかんにんせぬものはなみだにてとゞめてもとゞまらずかくこぼるゝことよといへり 季注に思ひわびさやうにてだにも命は有をなみだのみうきにかんにんならざるかと諫言したるてい有か」(四十五ウ)

皇太后宮大夫俊成

世の中よみちこそなけれ思ひいる山の奥にも鹿ぞなくなる

此哥の心はうき世とてのがるゝに道もなし山のおくに引こもりて一たん身をかくせばその所にもまたかなしき鹿のこゑせりと世をわびたるてい也玄旨の曰哥の心はいろゝ世のうき事を思ひとりて今はと思ひ入る山のおくにしかのものかなしげにうちなくをきゝて山のおくにも世のうき事はありけりと思ひて世の中よのうきべきみちこそなけれとうちなげく心はあきらかにきこゆ」(四十六才)

藤原清輔朝臣

ながらへばまた此ごろやしのばれんうしと見し世ぞ今は恋しき

此哥の心は此すへながくながらへなばものうしと思ふけふ此ごろの事も又やしのびはべらんうしかなしといひしすぎこし世を今はしたふにつけてなほゆくすゑの事もおもひやらるゝぞと何事もすへゝおとるへゆきてむかしににぬといふうらみ也 玄旨の曰哥の心は明らか也しだいゝにむかしを思ふほどに今のうしとおもふ時代をも是よりのちにはなほしのばんずるか万人の心にくわんずる哥ぞと也只世の中の人たのむまじきゆくすへをたのむかつね也」(四十六ウ)

俊恵法師

夜もすがらもの思ふころは明やらで闇のひまさへつれなかりけり此哥の心はいもねられずして物思ふ夜はせめて夜のはやくあけよかしと思へどなほあやにくにながくしてねやのひまさへつれなくてまてどもゝ白まぬと也宗祇の曰ねやのひまさへといへる詞めづらし思ひのせつなる所も見へ侍にやうらむまじきものをうらみ

なつかしかるまじきものをそのおもかげにする事こひぢのならば也ねやのひまさへとうちなげきたる所をよくゝおもふべしと云々」(四十七才)

西行法師

歎けとて月やはものをおもはするかこち顔なる我なみだかな

此うたの心はおよそ人のものおもひをするはわれから也人のさすることにもあらずひるはまきれてくらしもすれとよる月にむかひてはいよゝ心すみてもの思ひのまさるを月のおもはするやうにおぼえてうらみがほになみださへこぼるゝ事よと也これわがおろかなるをさすがに思ひさつしていへりやはといふ詞に心をつくべしかこつは所によりてこゝろかはれりこゝはうらむ心もつばらなり」(四十七ウ)

寂蓮法師

村雨の露もまだひぬ楨の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ

此哥の心はまきなどたつ山はいかにもふるき山又深山とこゝろえべし秋の夕ぐれはえもいはれずおもしるきにむらさめのひとそゝぎしてまきの葉の気色ばひたるその露もいまだかはかぬほどに秋ぎりのおこりてたちのぼりたるそのけいきいはんかたなしとよめるなり哥はそのときその心になりて見侍らねばよせいけいきほねじみがたしよくゝ心をもちひてあぢはふべし」(四十八才)

皇嘉門院別当

なには江のあしのかりねの一夜ゆる身をつくしてや恋わたるべき此哥は旅宿にあふ恋といふ心をよめりまづなにはの旅しゆくに見るべしその所の名におへるあしのかりねとよそへて芦は節あり一節といへるえんにて一とよといへりみをつくし又これもなにはのうらによみ侍る哥おほし舟のしるべのつなぎばしらをみをつくしといへりそれを身を尽しによせたり一とよのかりのなじみさへ思ひはせつ也ましてなれなつかしみたるちぎりはいかならんといいり又はてゝはいかゞあるべきといふ心もあり」(四十八ウ)

式子内親王

玉の緒よ絶なばたえねながらへば忍ぶることのよほりもぞする

此哥はしのぶ恋の心也玉のをは命のこと也わが命たへはたへよな
がらへなば大かたしのぶ心のよほりてはては人もしりあだなる名
をももらして人の為わが為はかなきことになりなんとあんどたる
哥也玉のをといふよりたへなばたへねといひ今の思ひよりゆくす
へを思ひやればながらふるほどあさましきことにならんと也 季
注にたへなばたへねとは絶ばたへもせよとなり白露は消なばけな
んといふがごとしよほりもぞするはよほりもしやうずるぞなり」
(四十九才)

殷富門院大輔

見せばやなをしまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず
此哥の心をしまは名所なりあまの袖はぬるゝがうへにぬるゝもの
也それだにも色のかはる迄にはなきをわが袖はつれなき人ゆへに
血のなみだのかはくひまなければくれなるに色かはりたりこれを
その人に見せばやな是を見ればよもやあはれと思ふべからんとなり
季注にをしまの蟹のそでほとにわが袖はぬるゝのみかはふかき
なげきのなみだにて色さへかはれる思ひのせつなるほどもしらせ
たきとぞ」(四十九才)

後京極摂政前太政大臣

きり／＼すなくや霜夜のさむしるに衣かたしきひとりかもねん
此哥の心は霜夜のころ小菴ころもかたしききり／＼すのとこのほ
とりになくこ糸をきゝさびしくもあはれにもかなしくも思ひつゝ
け此ながき夜を此まゝにてひとりねをする事かとせつに思ひわび
たる心ばへまことにその人になりて見はべらばゆうにあはれふか
ゝるべしさむしるはせばき菴也それをさむしにいひかけたり衣か
たしきはおびひもとかで丸ねするなり又きり／＼すは俗にいふこ
ほろぎの事也」(五十才)

二条院讃岐

我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなし
此哥の心はしほ干の時にもあらはれぬ海中の石のごとくうき人ゆ

糸によるひるとなくなげきつゝけてわが袖のかた時かはくひまな
きもおもふ人はしらでなほよそ／＼しくすることよと也しほひに
見へぬとよくとへいだしたる所たへ也しかも哥のさまものつよ
くしてあはれふかし 季注に曰人はしらねどもかはく間もなしと
いふにはあらずかはくまもなき思ひをいはでも人はしるべきこと
なるにつれなくてなほしらぬよし也」(五十才)

鎌倉右大臣

世の中はつねにもがもな清くあまの小舟のつなで悲しも
此哥の心はたゞ世の中をつねになして見侍らまほしきものなりう
き世はとにかくに蟹のをぶねにうちほゆるつなでのあともなきが
ごとくはかなき事のみ也いとかなしきことにこそといへりあまを
ぶねのつなぎとめぬがごとくをしき人の命もつなぎとめること
かたかるわが世のはかなきを目のまへにたとへたる哥なりつねに
もがもなはかはらずしてあれかしな也かなしもはかなしくもある
かな也」(五十一才)

参議雅経

三芳野のやまの秋風さよふけてふるさとさむく衣うつなり
此うたの心は所は三よしのゝ山ほとりにて風ものさびしくふきわ
たる夜のいたくふけぬるころまで耳をそばだてゝきけば秋のあは
れのせつなるに殊にはるかなる村里にころもうつきぬたのこ糸し
てひとへにひとりねのさむきをさへひえあかしたるてい也きり／
＼すなくやしも夜の哥の心に思ひめぐらして見侍るべしこともな
きやうなれどもあはれふかしふるさとほものさびたる賤が里をい
ふ也」(五十一才)

前大僧正慈円

おほけなくうき世の民におほふかなわか立袖にすみ染の袖
此哥の心はおほけなくはおよびがたしといふことばなりわがたつ
そまとはひ糸い山んをいふさてわれ此山の座主となりては世の中
の民を子のごとくあはれみ袖をおほふて護持すべき行者なれども
およびなきわがごときものは只いたづらに此山のあるじとなりて

住ばかり也とひたすらにおのれをかへりみてよみたる哥なり」(五十二才)

入道前大政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり
此哥の心は花はあらしのさそひちらしても雪と見て庭をもはら
で又せうくわんする所も侍れどわが身に老のいたるれはすべきや
うもなくあさましき事にこそといへる心にてふりゆくものはわが
身なりけりとよめりゆきならでといふよりふりゆくものはといひ
たる所まことに妙にあはれふかきなり」(五十一才)

権中納言定家

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ
此哥の心は松穂のうら名所なり来ぬ人を待といひかけ夕なぎとま
つころをいひのべたりさてやくやもしほと松ほのうらのものをそ
のまゝにもちひ身もこがるゝとわがまつ思ひのせつなると夕なげ
に塩やくにたとへたるなり夕なぎは風も凪てふかずしづかなる夕
がたなり此卿あまたの哥ありつらんねどわけて此百首にのせら
れたり」(五十三才)

正三位家隆

風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける
此哥の心はならの小川めい所にて水無月はらひする川なり風そよ
ぐならとうえものにいひよせたりすゝしかるべきてい也みそぎと
はみな月つごもりのはらひにてけふはまだなつなれどそのすゝし
さ且水へんのもやうちつとも秋にことならず只此みな月はらひす
るばかりがいまだ夏といふしるしにてありけりといへる也夏越の
はらひはやく秋にうつし侍らんといふ祀なりよくかなへてよめ
り」(五十三才)

後鳥羽院

人もをしひと恨めしあぢきなく世をおもふゆゑに物おもふ身は
此哥の心は人もをしとは世の中の民をいたわりおぼしめす也しか

れども御心のまゝによの中をさまらずして王道すたれたる時代と
てたみの為おほしめすにつけて又人もうらめしく御心をなやまし
給へると也是によりてあぢきなく世を思ふゆへにもの思ふとあそ
ばしたりかたじけなき御心なりされどもその徳沢のいたらざる所
ある事は堯舜もそれなほやめりとなんぜひもなきことならずや」
(五十四才)

順徳院

百敷やふるき軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり
此哥の心は百敷とは内裡百官の座席也ふるき軒ばとはふりたる大
内ののきばにて王道のおとろへたるをなげき思しめす意をふくめ
りのきばといふよりしのぶとあそばしたりしのぶは草の名にての
きばに生ふるもの也それをむかしをしのぶによせての給へりしの
びてもしのびてもなほしのばるゝむかしぞとむかし王道の盛なり
し御世をしたはせ給ふ也 季注にしのぶといふ詞たへしのぶかく
れしのぶ恋しのぶなどみな心かはり侍るこゝのしのぶはむかしを
したへる也」(五十四才)

(広告)

紅葉百人一首(女庭訓女大学入) 大本

同上 摺 大本

春栄百人一首 大本

丹鶴百人一首(女今川入) 半紙本

小松百人一首 半紙本

翠百人一首 半紙本

湖月百人一首(源氏絵尽し入) 中本

常盤百人一首 中本

小倉百人一首(色入) 小本

同 墨 摺 小本

東京書林 芝神明前 (和) 泉屋市兵衛板」(裏見返し)